賢いはたらき方のススメ

光石 研さん

NHK連続テレビ小説『エール』、『にじいろカルテ』や『バイプレイヤーズ 名脇役の森の100日間』など、多くの作品に出演している、俳優の光石研さん。1979年、16歳の時に、映画『博多っ子純情』の主役としてデビューし、役者人生44年目を迎える。現在では優しい父親からコワモテの組織幹部、少し頼りないデザイナーまで役柄は幅広く、名バイプレイヤーとしてドラマや映画に欠かせない存在だ。「要求にぶれることなくこたえられる職人」が目指すべき役者、でも自分はまだそうではないと、自然体のかっこよさを貫ける光石さんに、厳しい世界で長年にわたり活躍し続け、求められる存在となる秘訣について伺った。

撮影現場の楽しさにはまった16歳、趣味を捨てた30代。

— 映画『博多っ子純情』がデビューですね。俳優を目指すきっかけは？

光石：地元福岡で人気のあったマンガが映画化されるときに、出演者を募集していたんです。それに同級生3人で応募して、僕ともう一人が受かったんです。高校2年生でした。1か月間泊まり込みのその撮影現場が楽しくて、俳優になる前に映画撮影の現場の楽しさを体感し、俳優を目指すというよりも、こういう現場にいたいという思いが強かったですね。

— 上京して本格的に俳優活動を始められたのですね。

光石：映画に出たことで、事務所への誘いやCMのお話をいただいたこともあって上京しました。親との約束で大学には通ったのですが、本音では行く気もなく俳優になることしか頭になかったんです。今だから言えることですね。20代は独り身ですし、お金がなくても生活はできました。バブルがはじけた頃、ちょうど30代になり、仕事も過渡期でしたね。

— 壁にぶつかったということでしょうか。

光石：これはどんな仕事でもあると思うのですが、30代はちょうど仕事を覚えて、一端の気になって偉そうに文句を言ってしまったり、誰にでもある時期ですよね。30代前半は仕事がなかったです。

— 仕事がない時期を乗り越えたきっかけは何だと思いますか。

光石：実は全く仕事がない頃は、趣味をたくさん持っていました。野球やサッカーをやったり、イラストを描いたり、書や篆刻もやっていました。でも、こうした趣味は成功した俳優がやるものだと思いなおし、30代半ばに趣味をすべて捨てたんです。全神経を俳優に注ごうと。

Copyright (c) NTT COMWARE CORPORATION

ずっと俳優しかやってこなかったですし、映画の楽しさを知って、その中でやっていきたい、高校2年生の時の思いを味わいたいという思いが強く、自信があるわけではないのに、どうにかなるだろうとは思っていました。家族がその働き方を理解してくれたのも大きかったと思います。

A面よりもB面が好み。へそ曲がりがバイプレイヤーに通じた?

— 光石さんにとってバイプレイヤーとはどういうことでしょうか。こだわりはありますか。

光石:若い頃から絶対に主役とは思っていませんでした。子供の頃から、音楽でもA面よりもB面が好き。みんながプロ野球のジャイアンツや阪神を応援しているときに、近鉄が好きなど、へそ曲がりなところがありました。ラグビーでなら、センターフォワードよりもハーフポジションがいい。でもバックスではないというところです(笑)。居心地がいい場所でしょうか。

— 光石さんの作品の中には、自然体に感じる役が多いですね。

光石:そうかもしれません。どこまで演じているのか、どこまで自然体なのかという“キワ”がものすごく面白くて、役者として好きなのかもしれません。
あとは、劇団で演劇の教養を身に着けたり、勉強した人に比べて、演技の勉強をしていないのがコンプレックスでもあり、僕の武器でもあると思います。
監督によって、シリアスな怖い役やコミカルな役など両極端なオーダーがきます。それは僕をいろいろな見方でしてくれるからですよね。うれしい悲鳴です。

— 理想とする俳優はいますか。

光石:成田三樹夫さんでしょうか。高校生の時に根津甚八さんが主役の映画『その後の仁義なき戦い』(工藤栄一監督)を見ました。映画の中で、根津さん扮する若い衆に、成田三樹夫さん扮する任侠者がヒットマンにと口説くセリフがあるんです。そのセリフが良くて、僕もこう言われたらヒットマンになるなと思ったんですね。成田さんのような脇役の俳優が好きでした。当時、ピラニア軍団という、脇役を務める俳優の集団も好きでした。やはりB面好きですね。

大杉漣さんがつないだ“バイプレイヤーズ”の“元祖バイプレ”

— テレビ東京の人気ドラマ『バイプレイヤーズ』は、名脇役として活躍されている俳優が主役のドラマですが、そのお話が来たときはどのように感じられましたか。

光石:『バイプレイヤーズ』は、元をたどると15年前にさかのぼります。当時、大杉漣さんはじめ、田口トモロヲさん、遠藤憲一さん、寺島進さん、松重豊さん、脇で頑張っている俳優を週刊誌が取り上げてくれることになり、その後映画祭が開催されました。その時に大杉さんが、「せっかくこうして集まったのだからこのメンバーで何かやりたいね」と。

Copyright (c) NTT COMWARE CORPORATION

それから15年を経て大杉さんから電話で「何かできるみたいだよ」とお話をいただいて、そのあと別の現場でお会いしたときに、「やれるらしいよ」と。そして実現したのが『バイプレイヤーズ』なんです。

— 大杉漣さんのお話から始まったのですね。

光石：そうですね。おじさんたちがわちゃわちゃとにぎやかな設定になって、話のストーリーよりも最後は飲み会の場面で締めたりと、大杉さんとみんなで意見を出し合って作っていきました。

— 4月に映画版が上映されます。ドラマで3シリーズ、ついには今回の映画まで続くのは素晴らしいですね。

光石：残された僕ら4人にとって、『バイプレイヤーズ』は大杉漣さんありきのものでした。ですから大杉さんが亡くなってしまった今、続編はできないと思っていたんです。ただし、4人そろって今までとは違う形の設定になるならいいのではと。4人そろうならやらしてくださいとお伝えしました。そして出来上がった台本が、いろいろな俳優が出演する形になっていたので、これなら面白いと思いました。

— 俳優は若い人からベテラン、主役級の方まで100名出演しているのですよね。

光石：濱田岳くんや柄本時生くんなどの若い俳優がたくさん出演しています。田口トモロヲさんの言葉を借りるなら、「これで次の世代にちゃんとバトンを渡せるものになった」と。僕もそう思います。

— バイプレイヤーズ4人の俳優さんたちはプライベートでも仲がよさそうですね。

光石：仲はいいですね。撮影はドラマと並行して2～3か月撮影していたのですが、僕ら4人はそんなに出番がないので、ときどき会うくらいでした。でもそれが僕にとっては心地いいんです。べたつかない距離感、一緒に撮影して、じゃあねと別れる。また現場で会った時にわちゃわちゃ騒ぐ。そのべたつかない雰囲気が“かっこいい”と思うのです。今回の出演者には、僕ら4人は“元祖バイプレ”と呼ばれているのですが、みんな大人で品がいい付き合い方をしていると思います。

『バイプレイヤーズ～もしも100人の名脇役が映画を作ったら～』2021年4月9日公開、配給：東宝映像事業
©2021「映画 バイプレイヤーズ」製作委員会

Copyright (c) NTT COMWARE CORPORATION

不要不急―静かに待つ潔さが俳優の仕事

― コロナ禍で俳優の仕事はどのように変わりましたか。

紺色が好きで、ファッションでもその都度で印象を変えたくないと話す光石さん、取材時も紺のジャケットに黒い眼鏡をカッコよく自然体でコーディネートしていた。

光石：俳優の仕事は不要不急な事柄だと思いました。例えば、飛行機で「お医者様はいますか」というアナウンスを聞くことがありますが、「俳優さんはいらっしゃいますか」ということはないですよね。舞台の俳優さんなら、一人舞台をやって励ますこともできます。
しかし、僕のように映像の俳優の場合、照明をあてて、カメラで撮って、声を拾ってもらわないと成り立たない。スタッフもそうですが、みんなでエンターテインメントを作っています。励ますことはできても、個人の力は微力で何の役にも立てないと、つくづく感じました。

実際に、仕事は2か月間ピタッと止まり、撮影中のドラマも中断、中止や延期になったものも多くあります。この2か月間は久しぶりに仕事をせずに過ごしていました。でもデスクに置いてある台本が気になって、ただ、撮影までの期間が見えないので、読むのが早すぎても身につかないとも思い、いつ読み込めばいいのかという判断がしづらかったですね。

― 現在、撮影は再開していますか。

光石：はい、手指消毒、検温は毎回行い、新しくフェイスシールドをした状態でリハーサルを行っています。演技の仕方も変わりました。フェイスシールドをした状態だと声が聴きづらく、表情も読み取りにくいので、共演者とのかけあいの肌感がつかみにくい。まだ手探り状態ですね。こういう時は静かに、落ち着くのを待つほうが潔いと思いました。

何事もなかったかのように再開、
プロフェッショナルとしての“かっこいい”を感じる現場の働き方

― 再開されたドラマ撮影の現場を見てどう思いましたか

光石：あらためてプロフェッショナルとして撮影現場が“かっこいい”と感じました。中断していたドラマ『コールドケース3』の撮影が再開されたとき、2か月ほど中断していたにもかかわらず、スタッフは空白期間がなかったように、一喜一憂せず、段取りをして、すぐに撮影を開始できたんです。僕らの仕事は何事もないから続けられる、やらせてもらっている。それはスタッフも同じことを思っていたはずです。それを分かったうえで、誰もがすぐに普段通りの働き方で動いていました。プロってこういうことなんだろうなと。

― 新しいドラマ制作の場合、スタッフも共演者も幅広く集まると思いますが、世代を超えて一緒に仕事をする楽しさはありますか。

光石：そうですね、若い人との仕事はとても刺激になります。今の若い世代は演技がうまいですし、若い監督はとてもクレバーです。みんな発想が豊か、クリエイティブなことに年齢は関係ないと思っているので、新しい価値観を教わるいい機会ですね。とにかく楽しい。ただし、そんな彼らにも60歳の役はできない。それをやるのはこちらに任せてと。

Copyright (c) NTT COMWARE CORPORATION

— 『バイプレイヤーズ』の松居大悟監督も若く、30代ですね。一緒にお仕事をされていて驚かれたことなどありますか。

光石：発想がすごいと思うことがあります。たとえば、「頭の上にミカンを載せてください」といきなり言うんですよね。みんな一瞬「？」が頭に浮かんで0.5秒は考えるんですけど、すぐにこの人になら任せた方がきっといい、わかったOKとなる。これは、僕も含めて俳優側の勘所でもあります。この人にのると面白いことが起こるという勘所。信頼感があるんです。バイプレイヤーズのシリーズを通してそれを実感してきたから、クリエイティブですごい人だと思います。今回の撮影もいろいろなことがありました。でもそれができることがお互いに“かっこいい”と思います。

“昔、60歳の役者が面白いことをやっていた”を伝えて撮影現場のバトンをつなぎたい

— バイプレイヤーというポジションは、光石さんにとってどんなものですか。

光石：どんな現場でも自然体でいける俳優。演技というものは自分の肉体と精神でしか表現できないので、NHK大河ドラマで明智光秀を演じた時も、監督と相談してナチュラルにやらせていただきました。

— 俳優として働くうえで欠かせないポリシーはなんでしょう。

光石：最近よく見るテレビ番組に、料理雑誌の男性編集長が、街のレストランのシェフに料理を教わる番組があります。編集長は最初はうまくできても、次には失敗する。しかし、シェフは毎回同じ味、形のオムレツを作るんです。僕もそうありたいと思います。

つまり、要求されることにぶれない、きちんとした演技を提供する。クオリティーを保ってオーダーにこたえることができる俳優になりたいですね。それができたらかっこいいと思います。
あとは、現場ごとの色、雰囲気の違いがすぐに分かるのがベテランなのかな、とは思いますね。

— 光石さんが目指す俳優は？

光山：職人志向です。アーティストではなく、同じクオリティーの演技を提供できる職人ですね。今回『バイプレイヤーズ』に出ている若い俳優たちが60歳になった時に、次の若い世代に、昔60歳のおじさんたちの役者がいて、こんなわちゃわちゃと映画の撮影現場をやっていたんだよと伝えてもらえればうれしいですね。

Copyright (c) NTT COMWARE CORPORATION

取材後記

光石さんはとても自然体で接してくれました。受け答えも飾らず、素顔を出してくれる。役者という仕事が心から好きで、撮影現場という仕事場への深い愛情を持っているのだなと感じました。バイプレイヤーとして知られていますが、それはそれだけ演技の幅が豊かで、自然体で演じられるプロだから、求められるのだろうと思います。光石さんが子供の頃に描いていた還暦の男性像、早い時間から蕎麦屋で文庫本を読みながら晩酌、就寝前にバーボンをいただいて眠りにつき、休日には神保町の古本屋でのんびり本を探すという男性、60歳では早いかもしれませんが、きっといつかは実行してくれそうな気がしました。そしてその様子をどこかで映像でそっと見られたら幸せな気持ちになるのではないかと思える方でした。

プロフィール

光石研さん

俳優

1961年、福岡県生まれ。高校2年生の時に映画『博多っ子純情』(1978年)の主役に抜擢されデビュー。高校卒業と同時に上京し、事務所に所属。名バイプレイヤーとして数多くの映画、ドラマ作品に出演。主な出演作品に『アウトレイジ最終章』『ヒミズ』『シン・ゴジラ』、ドラマ『バイプレイヤーズ』『デザイナー渋井直人の休日』など。2021年4月9日から『バイプレイヤーズ ～もしも100人の名脇役が映画を作ったら～』が公開される。愛車は1963年式のメルセデス・ベンツ190。ファッションやインテリアにも造詣が深い。

Copyright (c) NTT COMWARE CORPORATION